

終局から紡がれる

元王子と陛下の

寵愛譚

お題「王子」 枝理菰



あらすじ

アスタリカ帝国がバリカス帝国に滅ぼされた。

元王子（ユエ）は捕らえられ、五十日間の鞭刑を受けた後、処刑寸前で陛下の「待て」により命を救われる。

その代わり彼は陛下の性奴隷として扱われることに。

だが陛下の真の望みは、幼い頃共に遊んだ（ユエ）の記憶を取り戻すことだった。



バリカス帝国
陛下：ルーカス

「まあいいそうだな、俺のを
舐めるか、
それとも**自慰**をするか選べ」

「俺は別にそこを舐めろとは
言っていないのだが、くくっ
ユエは昔から**面白い**な」

「はぁーこれが他国で聞いた
結腸責めというやつか……
とんでもない代物だな」



「はっ早く挿れろっ、バカ!!」

「くっ……」

そんな真っ赤かな顔で、誘われたら男として我慢なんてできるはずもない。押し込み体の内側へと挿るとすかさずイっていた。

「これは困った、挿れただけでイってしまうなんて、どちらが変態かな?」

「はあ……はあ……ルーカスっ……」

名前を呼ばただけですごいなっ。腰を持ち打ち付けるように出入りを繰り返した。

「あんあんあんいっつー 激しい」

「ユエ、覚えておけこれが最奥だ」

仰向けにしこれでもかと密着しさらに奥へと挿入した。

「ひぐっ!？」

ユエの様子は先ほどまでとは違い口をパクパクとさせ性器からは透明な液

を飛ばしていた。これはなんだと舐めるとしょっぱかった、まさか女ではあるまい、潮を噴いたというのか、男でも噴くのか。これは極上だ。

「ルー……ルーカスこれなに？　なんか変……俺どうなっちゃうの？」

「気持ちいいか？」

「っ分かんないっでも止まらないっ……」

「そうか、そうか」

俺はずるっと抜きそしてまたさらに最奥へと出入りを繰り返した。その度にグポグポと音が鳴り俺も止まらない。ユエが泣きじゃくり震えそれを堪能しているのは俺だということ。

しかし終わりは突然来た。ユエがピクリとも動かなくなったからだ。

「ユエ？」

ふっと気を失った。

抜くとドロリと精液が落ちた。俺も俺でかなりイってしまったからなんと

も言えないな。正直に言うとなんかこれまでの中で一番気持ちよかった。

「はあーこれが他国で聞いた結腸責めというやつか……とんでもない代物だな」

それとこの衣装は起きたら着させるか。

旧アスタリカ帝国

元王子：ユエ

「かはっ……

奥にはいりすぎっ…るし…

何度も当たって……」

「ルー……ルーカスこれな

に？ なんか変……

俺どうなっちゃうの？」

「はぁーっ今イったばっかだ

からそんな吸ったら

またっイっ！？」



「陛下……このままのスピードで行きますと城に着くのは相当遅くなってしまいます」

横に来てユエの様子を見た兵士はそう告げた。

「ああ、そうだな、もう少し頭の芯までおかしくさせるか」
足を動かし馬を走らせた。

「かはっ……奥にはいりすぎっ……るし……何度も当たって……」

「当たってどうした？ それにユエちゃんと掴まっていないと落馬してしま
うぞ」

「はあ……はあ……むりいっ……」

服の中で何度もイっていた。

「まったく、馬の振動でいくなど卑猥でしかないな」

「はあ……はあ……んぐっ……またイっ……あんあんあん」

くっそ、張型に嫉妬してしまうなんて、もし俺が挿入していたらどうなってい

た
だ
ろ
う
か。

く
た
っ
と
背
中
を
預
け
ら
れ
そ
の
ま
ま
何
度
も
イ
っ
て
い
た。

バリカス帝国

従者：シロ

「それじゃあまるで生まれた
ての**子鹿**ですね」

「私は……陛下のお心のまま
にですが兵士は
今だって**覗き見を……**」



扉が開かれた。外はもう真っ暗でテントを張っているところを見ると野営地点なのか。

「ユエ様、降りることはできますか？」

「あ、ああ多分」

そつと馬車から降りた。しかしやはり足腰がまだプルプルとしていた。

「それじゃあまるで生まれたての子鹿ですね」

「うっさい……」口を塞がれた。そして耳元で、

「声はなるべく控えめにしてくださいね。陛下は助けましたがあなたは旧帝国の元王子、なぜあの時殺されなかったのか疑問に思っている方は多くいますので」

俺はこくりと頷いた。でも疑問については俺も同じだ。どうしてあの場で救われたのか分からないからだ。

バリカス帝国
第二王子：ルーベルト

「まったく穢らわしい……男
でありながら、さらには
元王子でありながら
恥を知れ」

「貴様に**選択肢**なんてない」

「抑えろ、これでお前は私た
ちの**性〇隸**だ」



「殿下、こちらを」

「ああ、ちょうど張型が分かるな、この辺か？」

お腹の辺りを触っていた。それに手に持っているのは……。焼き印だ。

「やつやめろっ……」

「貴様に選択肢なんてない」

焼き印はヘソの五センチほど下にセットされ猛烈な痛みが全身に巡った。

「あががあっああああ！？」

「抑えろ、これでお前は私たちの性奴隷だ」

「はぁ……はぁ……ぐっ…」

「くくくっ」

「ギャハハハ」

続きは本編にて！